

小学校を卒業後の大正五年に東京市木挽町六丁目二番地（現、銀座七丁目十三―二十三）にあった山本周五郎商店（屋号を「きねや」と称した質店）へ住み込みの徒弟として奉公しながら、小説家への道を志した。

大正十五年、「文藝春秋」に投稿した「須磨寺附近」が同年四月号に掲載され、これが文壇出世作となったが、この原稿を出版社に送った際に「山本周五郎・清水三十六」と書いたのを、編集部の方で誤って清水三十六を落としてしまい、山本周五郎と言う筆名で作品を発表してしまったため、今日の作家山本周五郎が生まれたのである。そして恩人の名前、山本周五郎の筆名で小説家への道を歩むことになったのである。

昭和二十一年より横浜市中区本牧元町へ転居し、昭和二十三年春から中区間門町の旅館「間門園」の一室を仕事場としていた周五郎は、昭

和四十二年二月十四日、肝炎と心臓衰弱のため間門園の仕事場で死去。戒名・恵光院嶽文窓居士、朝比奈峠の鎌倉靈園に葬られた。

毎年二月十四日の命日には有志により「周五郎忌」が営まれている。享年六十三歳であった。なお、出生の地である甲州街道沿いの「みどろ」屋敷の庭には、幼い頃に三十六少年と遊んだ奥脇愛五郎氏のご子息である賢吾氏が、貴重な自費を投じた「山本周五郎生誕之地」という記念碑が建立されている。

参考資料（県立文学館刊行）

一九九八年十月

「曲軒・山本周五郎の世界」

山本周五郎

執筆者 西室 泰照

大月人物伝【61】

吉川行雄

月夜の詩人

大月市猿橋町の吉川商店は、通称「活版所」と呼ばれ、幕末期から家業として書籍の販売と印刷出版を手がけてきました。大正十二年の「北都留郡誌」の発行は人のよく知るところです。しかし、そこで生まれた行雄が詩を書き、鈴木三重吉の主宰する「赤い鳥」にかかわっていたこと、そして同人誌の編集と発行を店の中で手がけていたことを知る人は少ないようです。まず、詩を読んでみましょう。

三日月

吉川行雄

枇杷の花

お背戸。

三日月

冷い。

いたちっ子

ほう、ほ

うまやに

消えた。

—「赤い鳥」昭3・5—

これは、昭和三年五月の作で、岩波文庫の「日本童謡集」（与田準一編）に載っている作品です。緊迫した詩情が的確に伝わってきます。この童謡集にはもう一つの作品が収録されています。

たんちようも
とろり、とぼけて飛びます

風にふかれて
ふわり来て
とろり、お羽が消えます。

うすい月夜の
れんぎょうは
白い羽虫になります。

うすい月夜

吉川行雄

—「赤い鳥」昭4・3—

うすいおぼろに
いぶされて
月は魚になります
ほそい木にいる

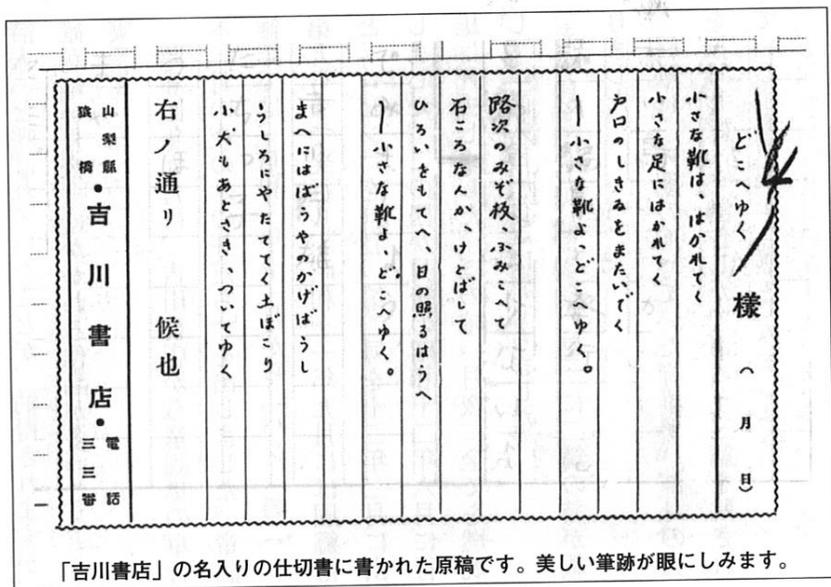
うすいおぼろの月が魚になり、丹頂鶴の羽となり、風にふかれて羽が消え、れんぎょうの花が羽虫になるという、奇想天外な展開を「まする」とやわらかくまとめているのは、天性の

詩情といえましょう。

この童謡集には、北原白秋、西條八十、サトウ・ハチロー、島崎藤村、竹久夢二、新美南吉、野口雨情、三木露風、若山牧水等、大正七年から昭和二十年までの、八十七人の詩が収録されています。そして、アイウエオ順の作者別の目次には、八十二番目に吉川行雄の名前があり、この二作品が載っています。

その前が与謝野晶子で、後が吉田一穂です。このように、吉川行雄は日本童謡史の一劃に燦然たる地位を占めているのです。行雄は、吉川商店の長男として生まれながら、その跡をとらず、弟に家業をまかせ、自分は店の一隅で詩を作り、同人誌の発行に専念したのでした。

行雄の仕事場である部屋の窓から、四季折りの月がよく見え、行雄が月と親しんでいたことを家人から聞くと、詩人仲間から「月夜の



「詩人」と呼ばれていたことが、納得されますが、確かに「月夜」にかかわる作品が多いことも事実です。

昭和四年九月に、吉川書店から童謡集の単行本「月の夜の木の芽だち」を出しました。童謡雑誌では、昭和三年十一月から「バン（鶴）」を第九号まで発行し、昭和十一年九月には周郷博と「ロビン」を創刊、第二号を十二年二月に出しました。この四か月後の昭和十二年六月に行雄は死去しました。ほの暗い月夜に全てを燃焼して、詩人吉川行雄は旅立ちました。

「赤い鳥」に十八篇、「金の星」に二篇の詩が載りました。

終りに、死期の迫っていた行雄が、渾身の力を振りしぼって詩作したであろう三篇を残されている手書原稿から読んでみましょう。

雪野で

雪に埋れた

北野のはてに

鶉がいち羽

凍えてをちた

トロイカが駆けて

鈴の音してた

どこぞの月に

銃と樹が鳴った

(十二・四・二七)

たんぽぽ

たんぽぽ たんぽぽ

その花は、月にほろんと

ともして

たんぽぽ たんぽぽ

その花に、日ぐれもほろんと あかっている

たんぽぽ たんぽぽ

その花に、どこやら野川も

きこえてる。

(十二・四・二八)

月夜

椎の木の

てうど高さに

ランタンのよな

月がでてゐる。

誰かふえ

遠田のかはづ

タンロンロン

風もでてゐる。

ランタンの

月のまぢかに

チラチラとさざなみ

雲もながれる

(十二・五・四)

昭和七年十月、吉川行雄は猿橋の自宅吉川書店から童謡詩集「鷺」を出版しました。その後記をみますと行雄が同人誌の発行に強い意欲をもやしていたことがわかります。

とうとするものである。

(パンの部屋にて吉川行雄)

年来の友原田小太郎君の第一童謡集を「パンの作品集」第四冊として、私の手から上梓することの出来たよろこびをまず云おう：原田君は、みずから称して鷺堂と呼び、いわゆる「童謡詩」をかいている若い詩人である。枯淡を愛し、匂

このように行雄は、同人誌を猿橋の自宅から刊行していました。そして、昭和十一年九月、周郷博と「ロビン」を創刊することになりました。周郷との出合いは、「母と子の詩集」(国土新書)にくわしい。

いなき感覚の境地を、しずかに守って、生活の苦悩をかたわらに、孜々として倦ことを知らぬげである。

わたしが一高(旧制第一高等学校)の一年生のとき、そのころ復刊した雑誌「赤い鳥」に、吉川行雄という詩人が美しい 月夜の詩を書いていた。

…まことに端嚴、正確、好箇の自然詩であり、写生詩だ。

…私は芸術を愛するのの上に於て、寡欲にしていさぎよい少数の士のころからなる清鑑にま

…一年ほどたったころ、吉川行雄は見も知らぬわたしに手紙をくれて、彼がだしていた「鷺」という詩の雑誌(個人雑誌)の仲間にならない

かといってきた。

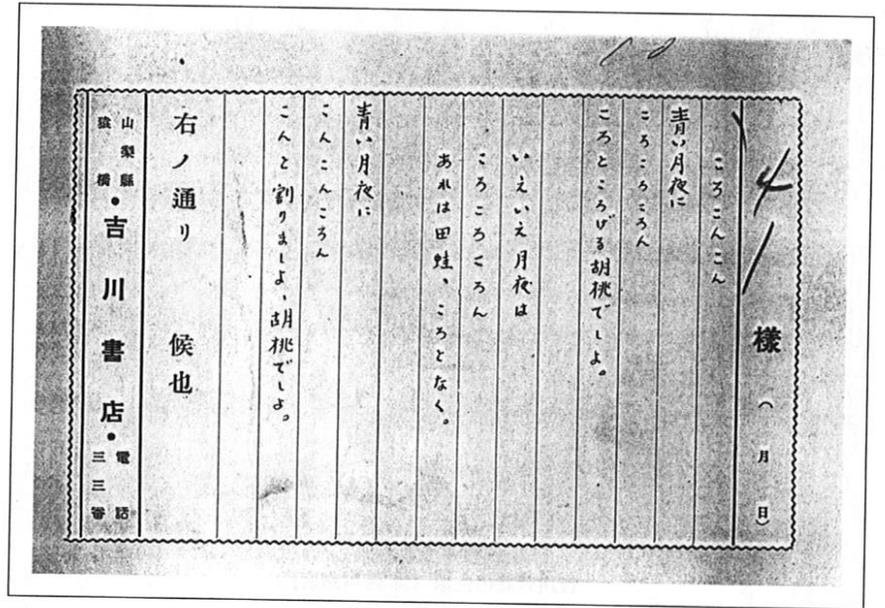
…さそわれるままに飄然と中央線に乗って、手紙で指定のように猿橋の駅にわたしは降りた。

こうして行雄は、詩人仲間との交友が広がっていきしましたがその中に富浜出身の藤井樹郎がいて互いに競いあっていたことは注目されてよいと思います。

「日本童謡史」によれば、吉川行雄は「赤い鳥」童謡欄の常連でした。「本年中、特に目覚しい働きをしてくれたのは、やはり与田、多胡、吉川(行)の諸君で…」とか「翼、多胡、吉川の諸君を初め…相変らずの力作の氾濫で…」というように、行雄は精力的に作品を発表し、しかも異彩を放っていたことが、こうした選後評に現われています。



吉川行雄の生家(現吉川商店)



吉川行雄は、昭和十二年五月、三十一歳で死去しますが、ここでは数多い作品の中から、死期の迫っていた直前のものを読んでみましょう。

ころころこん

青い月夜に

ころころこん

ころところげる胡桃でしょ。

いえいえ月夜は

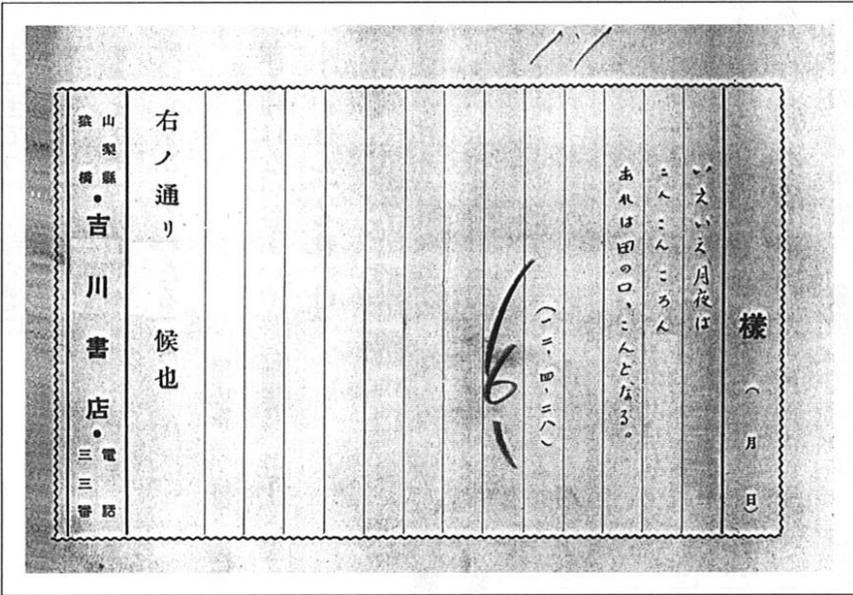
ころころころん

あれは田蛙、ころとなく。

青い月夜に

こんこんころん

こんと割りましょ 胡桃でしょ。



いえいえ 月夜は
こんこんころん

あれは田の口 こんとなる。

(十二・四・二八)

「青い月夜」という幻想的な静寂の中で、胡桃が「ころころこん」と響いたが、それは田蛙だった。美しい詩情がただよっています。

思うこと

丘のほとりの椎の木に

風がおはなしやめるころ

牧場の柵にくろ牛も

あかねの雲だかみてるころ

まちまでつづく野の道に
お日さまよならしてるところ
かぞえて七つ鐘の音が
野づらをひくくわたるころ

誰もゆけない谷あいや
小人が住んでる森かげで

逢魔がどきの妖精は
くろい上衣をつけるだろ

(十二・四・二八)

平穩無事であった長い一日も、「逢魔がどき」
〔たそがれ〕がくると、「妖精」は「くろい上衣」
をつけなければならぬだろう。行雄はここ
に自らの死を予感し、象徴しているように思わ

れます。「くろい牛」「だれもゆけない」「くろい
上衣」と、自らの短い一生を一日としてとらえ、
夕闇の中に死をみつめているように思えます。

白牡丹

白牡丹

日の照るなかに

葦は、まだ

つゆをためている

白牡丹、手の鳴るほうへ

ほら、いつも、すこしゆ れてる

白牡丹

微風のなかに

かげは地に

ひとつおちてる

白牡丹、手の鳴るほうへ

ほら、いつも、すこし向 けている

(十二・五・五)

亡くなった月の作品です。ここには死の不安
も翳りもなく、平穩な心のかすかな動きが明瞭
にとらえられているように思えます。

執筆者 井上 豊

協力者 仁科 義民

